
彼女までの背の高さ

津神 八尋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女までの背の高さ

【Nコード】

N45700

【作者名】

津神 八尋

【あらすじ】

翔にとって、蓮は八つ違いのお姉さん。ずっとずっと、そのままでいられるはずだったのに…

「間違いだらけの恋」の翔の小さい頃のお話です。時系列がむちゃくちゃなので最初に翔の学年が指定してあります。出来れば本編参照の事。（下のブログから飛べます。本編は連載中）読んでなくても、それなりにはお楽しみ頂けるかと思います。一話完結のシリーズもの。視点はお話によって違います。ひたすら蓮に振り回される、不憫な翔をお楽しみください。とりあえず完結いたしました。

日常茶飯事の憂鬱（前書き）

翔、中学三年。

日常茶飯事の憂鬱

「むかつく~~~~!!」

むかつくむかつくむかつく!!

「たいしょー! もう一杯ちょーだい!!」

「蓮ちゃん、もうそろそろその辺で止めといたら...?」

後で、何言われるか知らないよとのありがた〜い大将の言葉も今日は耳に入らない。

「だれに〜? なにいわれるって〜?」

ふん!

そんなこと言ってくれるはずの奴には、今日すっぱり、引導渡して来てやった。

ただ今しつかり午前中。朝じゃないわよ。十二時過ぎてるって事! なじみの居酒屋のカウンターにはもうあたしがいなくて。

看板まで粘ってまだ足りなくて、他のお客が居なくなったのを良い事に思いつきり大将にからんでる。

「何? 蓮ちゃんてばまた、振っちゃたの?」

四十過ぎ、良い大人の大将の宥めるような言い方が気にいらない。おもしろそうに言わないで頂けませんか? 大将様。

「振っちゃったんじゃない! 先に振ったのはあっち!!」

いや、振ったんじゃないでね、ただ単に浮気されてただけなんです。はい。

たかが浮気。

されど浮気。

浮気って言うけど、結婚も何の約束もしてない状態で、そーゆー事が起きるってのはただ単なる二股掛けられたって事じゃないのかしら。

二股…

このあたしに、二股…

許してなんかやるもんかってんだバーロー！！

お前の方が本気だ？

ちよつと魔が差したただけだ？

信じられるか！このお蓮さまをなめるなっぺんだ！！

「…それで、聞きたくない様な気もするけどどうしたの…？」

「そっこー投げ飛ばして、みぞおちと股間に蹴りいれて引導渡してきた！！」

うわゝゝ…と何処か明後日の方を向いてしまふ大将の顔を横目に見ながら、グラスに残っていた冷酒をくゝと煽る。

空手歴十五年、おまけに柔道も黒帯直前までかじってやったあたしの一撃はさぞかしこたえた事だろう。

ざまあみろ！！

二三日はどっちも使い物にならねーぞーきつと！

「もう一杯！」

「蓮ちゃん、いい加減に…」

「やーだゝゝゝ！ もつとのむゝゝゝ！！」

此処は居酒屋とかって言いながら、大将の趣味でお酒は美味しいの

しか置いてないから。

「…酒がかわいそうだ…」

「なに？なんかいった？」

ぶるぶるぶる…

思いつきり首を横に振る大将をしりめに、差し出された冷酒に躊躇いなく手を伸ばす。

く~~~~っ…

酒に罪は無い。

こんな時でも、もうめちやくちや美味しい。

しかし、まったくなんだって…

「……こんないい女に、な〜んでいい男が寄ってこないのよ…」

これはもう、何回繰り返したか解らないあたしの愚痴だ。

なんだって、あたしってばろくでもない男にばかり引つかかるのか…

言いたかないけど、あたしは決して標準以下では無い筈なのだ。

顔立ちはまあまあ、スタイルもそれなり。

特に胸は他人様より有るんじゃないかと思われる。

ナンパもされるし、告白もされた事だって一回や二回じゃない。なのに…

「まいかいまいかい、なんだってあんなやつばかり~~~~!!」

「…てめーに隙があり過ぎるからだろうが…」

後ろから聞こえてきたつめた〜い声に、一瞬酔いがさめた様な気がする…

「しょ、しょう…!?!」

腕なんか組んで後ろにそびえたっているのは春日井翔。
あたしの弟分であり、あたしの同居人でもあるのだが…

「な、なんだって、翔が…」

「あ、俺が呼んだ」

たいしょ～～～！！！！

ああ、もう言葉にならない悲鳴が脳内を駆け巡る。

「まゝた、振られたって？ このほか、あほ、まぬけ。だから、
あんな男止めとけっていったらどうが」

「振られたんじゃないもん！振ったんだもん！！」

「結果は同じだ。この学習能力不適格者。いい加減懲りる事を覚え
たらどうだ。二十二にもなつて」

「十四歳の中学生に言われたくない～～～！！」

そう、この、とてつもなく顔のいいふんぞり返った俺様な男は、実
はまだ中学生…十五にもなっていないバリバリの未成年なのだ！

「未成年がこんなトコくるんじゃないやねえ！」

「同居人の迎えに家族が来て何が悪い。来て悪いと思ってるなら自
重しろ、このバカ女」

「うわ～～～ん！！ 未成年にバカって言われた～～」

「バカをバカと言ってどこが悪い！」

あ～～ん！

八つも…八つも年下の癖して…

あたしはこいつに口でも顔でも頭でも、勝てた試しがいつこもない
んだ～～～！！

「…翔ちゃん、そのくらいでやめたげなよ」

一応、傷ついてんのは本当みたいだし…

「うわゝゝん！　たいしょう！やさしゝゝゝ！！」

「うわ！やめ！！　た、タンマ！！蓮ちゃんタンマ！！」

思わずカウンター越しに大将に抱きついたら思いっきりあせつてのけぞられる。

「あゝゝん！　たいしょーまで逃げるゝゝ…」

ひどいゝ　やばいゝゝ　あたしってそんなみりよくないゝゝ？

と、そのまま大将を押し倒しそうになったあたしの腕が、もんのすごい力で引きはがされる。

「…いいかげんにしろ…」

「…へ…？」

「…俺が、どんだけガマンしてるかわかってんのか…」

見あげた先はものすごい形相の翔の顔。

え…？ガマン…？

なんのガマンかなゝ…

怒っても、やつぱりすんごく観賞価値の有る翔の顔をほけらっと見あげながら考える。

きれゝだねゝ…

やゝつぱり、翔以上にきれいな男なんていないのかなゝ

こゝんな綺麗で、なんかもそろった翔でも、なんか我慢する事っ

てあんのかな…？

ふわふわふわふわ。

あれ…？あたま、まわんない…

ふわふわふわ…

よった…？ あたしよった…？

かんがえよーよ… 考えて… 考えらんないよ…

「…あゝあ、つぶれちゃった…」

やっぱり翔ちゃん呼んどいて正解だったね。

うつらうつら…

あたまのうで、たいしょうのこえがする。

「…いつも、すみません… じゃ、連れて帰ります…」

応える翔の声もふわふわ… なんだか溶け込んで行きそうで。

「…いい加減、あきらめる気は無いの…？」

八つだよ。きつくない？

あきらめる…？

翔… なにをあきらめるの…

「…いまさら…」

最初に会った時から決めてたんで。

最初…さいしょ…

しょう…翔…

あたしの翔…

大事な大事なあたしの弟…

おこつてても、なにしてみても、きれいで、それでいて優しくて…

「…きてくれて…ありがとう…」

ぽつりと一言。

そのまま、すーっとあたしの意識は闇の中に溶ける。

「バカ蓮」

眠りこけた蓮の体に肩を貸して、引きずる様にして俺は家に向かう。

「ばか蓮…」

まだまだ、おぶつても抱きかかえてもやれない小さな自分の体が恨めしい。

蓮は168センチ。

俺は、やつと159。

まだまだ… まだまだこいつに、身長ですら追いつけない。追いつきたい。追い越せない。

もっと早く、

もっともっと早く大人になりたい。

早くお前に追い付きたい。

「待つてろ…」

なんて、本当は言える訳じゃない。けれど、

待つてろ。

俺が、お前を追い越すまで。

何もかも—— 何もかもがマイナスからのスタートなんだ。

これぐらいで折れる様な生半可な気持ちじゃないって、もう心の底からわかってる。だから、

「まつてろ…」

俺が、お前に追いつくまで。

その時、誰がお前の傍に居ても絶対に取り返してしまうと思うから。

「だから、待ってる」

俺を、犯罪者にしなくなったら。
そのまま、お前のままで待っている。
必ず——必ず捕まえるから。

待っていて。

そのままの君で待っていて。

ぼくの背が君に追いつくその日まで。

想いは、まだ、届かない。

小五のぼくら（前書き）

翔、小学五年。

小五のぼくら

天高く、馬肥ゆる秋。

空はとてつもなく澄んで青く、何処からか金木犀の匂いがこの教室にまで漂ってくる。

「—— おーい……」

「……」

「おーい、翔、生きてるか」

ふつと我に返って振り向くと、思いもかけずすぐ傍に他人の顔が有ってらしくない思いっきりのけぞってしまった。

「うおっつ！翔がのけぞった！」

「おお！驚いてる驚いてる！」

「うわゝ、めっずらし」

ここぞとばかりにはやし立てる級友どもに、ぎろりと一睨みをくれてやってから、おれ、春日井^{かすがい} 翔^{しょう}は最初に声を掛けてきたカズ——

—— 斉藤^{さいとう} 和也^{かずや}に向き直る。

「……なんか用か……」

「うわ……不機嫌……」

怒った？

いじめるいじめる？

一昔前のネタでカワイ子ぶっても、相手が同じ年のガキじゃなんの効果も無い。遠慮なくはたき倒してやる。

「いてー！！ひでーぞー翔！」

「用が有るならさっさと見え！」

それだけでなく今日は機嫌が悪いんだ。てめーらに構ってる余裕なんてあるもんか！

「いやー用ってんじゃないんだけどさー」

根に持たないのはカズの良いところではあるが、

「お前んトコ、今日、来る？」

――地雷を踏むな――！！！！

思わず、机に突っ伏してしまう。

そこだ！そこなんだ！！ おれがこんなにくらくくなってるのは！！問題は、今日の五時間目。

俗に言う「授業参観」なんてものがこの学校にもあって…

「あ、オレのそこはかーちゃんが来るって」

「おれも」

「おれんちはオヤジが来そうなんだよなー ほれ、お祭り好きだから」

他はいい！

ほかのヤツラのオヤジだろーがおふくろだろーが、来ればいい！どんどん来てやってくれ！

しかし！しかしだ！！

「—— ンで？ 翔んところは？」

「……」

「蓮さん、来るのか？」

「…こない…」

「えー！なんで？」

「…あいつだつて学校だ」

「でも、いつつもきてたじゃないか」

「今年は、来ない…」

「なんで？」

「…言つてない…」

「は？」

「…プリント、わたしてない」

「えー！？なんで！！おれ、楽しみにしてたのに！！」

ブチっ！

たのしみ… たのしみ、だどどどど？？

「——！！ 来てたまるかどどど！！」

立ちあがって思いっきり叫びまくってやる。

「なにが楽しみだ。なにが！！ え！？ 言えるもんなら言ってみろ！！」

「えどどど？ だって、蓮さん大人だし美人だしスタイルいいし…」

「言つなどど！！ それ以上言つなどどど！！！！」

ぜいぜい…息が切れる。

「とにかく、今日、蓮はこない！ 期待なんてすんじゃねーぞ！」
「へいへい」

カズの気のない返事と同時にチャイムが鳴って、おれはなんとかその話題から解放される。

——
蓮…

授業を上かがみの空で聞きながら、ぼうつと空を見上げてしまつ。
各務 蓮れん——

おれの一応、姉って事になるんだろうが…

おれには両親が無い。

これは正確じゃないな。

おれの両親は、おれが五歳の時、二人まとめて事故であの世とやらにいつてしまった。

（あの世つてのはじいさまが言ってる事だから、おれはそれがどんなとこなのかまるで知っちゃいないのだが）

ともかく、両親が、おれのそばからまとめていなくなった時、周囲の大人は思いつきり悩むことになったらしい。

なにしろ、おれの父親も母親も、その両親はおろか、親類いところ、兄弟のたぐいまで誰ひとり生きてるものがいなかった。

このままではどうしようもない。可哀そうだが施設行き——

と、なりかけたおれを引き取ってくれたのが蓮のじいさまだった。

じいさまは、どうやら昔、おれの父親の先生をやっていたそうで…

何を思ったのか、そんな細かい繋がりがりしかない筈のおれを、ほいっとはかりに自分の家に迎え入れちまった訳だ。

その時、おれは五つ。

蓮は十三。

ぎっくり腰で迎えに来れなかったじいさまの代わりにおれを迎えに来てくれたのは蓮だった。

『初めまして。あたし、かがみ れん。』

『よかつたら、あたしとくる？』

そんなときのおれに、他の道があつたわけじゃないんだけど…

薄暗い部屋で見あげたセーラー服の蓮は、それはそれはきれいで…

—— 道をまちがえた…

どう、かんがえても、ほかに方法をさがすべきだったんじゃないだろうか。

薄茶の髪。はつきりとした美人とっていい顔。そんでもって、そこら辺じゃめつたに見かけない様な、いわゆるところのナイスバディ…

こんな言葉ばかり覚えさせられるぐらいに蓮はかっこいい。

正直、ちよびつとばかり自慢だったりもする。

しかし、しかしだ…

今までの授業参観と名のつく行事もののさんじょうを思い返してぞっとする。

正解だ。

プリント、渡さなかったのはどう考えても正解だ。

とにかく、めんどくさい事ほつたらかしのじい様はこの際おいいて。

おれは今日は平和にくらすんだ！

それは、本当におれの心からの叫びだったのだが……

「しょう~~~~~!!!!!!」

うしろに、ハートマークでもついていそうな声が廊下中に響いておれはおもわず固まった。

「な...な...な...」

「あ！蓮さん！！」

「ハ〜イ、カズ。げんき？」

「げんきげんき！ やっぱりきたんだ〜！ やった〜！」

カズのあほう！ やったじゃねえ！！

「蓮！お前、なんで！」

「翔、だめだよープリント勝手にほつといたら。信くんのおかあさんからお誘いもらってびっくりしちゃった！」

きちんと見せなきゃだめじゃん。

そう言つて、おれの額をペチンとつついた蓮のまわり—— つまり、おれのまわりは人だかり！！

「お...お...おまえ、そのカツ」

「え〜？ へん？」

久しぶりの小学校だから、思いっきり決めてみました！

そう言つて、わざわざ一回転しやがった蓮の服と言えば、

上は、体にぴったり張り付いたタンクトップ（キャミソールっていつてたか？）それに見せるブラとかつてひもも本体も、思いっきりレースを使ったやつを胸に張り付けて。カーテীগンを着ちゃいるが、そんだけ透けてちゃ意味ねーだろーがよ！！ おまけに...

んなんだ〜！その、とんでもなく短いズボンは！ ホットパンツ
って言ったか！？ だ〜〜！！ そんな、学校にはいてくるも
んじゃねーだろーが！！

だから、いやだったんだ〜！！

ふつうに制服着てもめだつ奴だったのに…

お前がそんなもんきてきた日にゃー、一生このネタがおれについて
回るだろうが！！

「…お前、学校は…」

「えーとね、訳言ったら即OK」

どうせ受験も近いし、自宅学習でいいって。
にっこり。

わかってない…

ぜってーこいつはわかってねえ！！

もう一言、せめていつてやろうとしておれが口を開いた時、まるで
タイムアップのように五時間目のチャイムが鳴り響く。

「じゃ〜ね〜！！」

翔！ がんばって〜！！

のーてんきな蓮の声におされるようにおれは席につくしかない。

ざわざわ…ざわざわ…

落ち着きそうにもない、父兄たちの話声。

それを背中に聞きながら、おれは、これから一時間のいごこちの悪
さを思っ、小さくためいきを付くしかなかった…

ほしいもの（前書き）

翔、
中学三年。

ほしいもの

十二月に入ると、風がいきなり冷たくなる。

経費削減だか何だか知らないが、「子供は風の子」なんてものをお題目に、教室に暖房なんてものは入った試しが無い。

それでも、それほど寒いと思わないのは、こんな狭い所に40人も人間がひしめき合っているからだろう。

中三の冬。

いよいよ受験も本番と言う訳で、なんとなく教室には今までにない緊張感って奴が有る様な気がする。

しかし、俺——春日井 翔の場合はそのことで頭を悩ましてる訳じゃない。

週末の金曜日。今日は多分…

「おい、翔！」

ふつと考え込んでいた顔を上げると、そこにはそれこそ小学からの腐れ縁、何の因果か、ずーっと同じクラスに押し込まれちまった斉藤和也の顔が有る。

まあ、こんな風に俺に声を掛けて来る奴は、こいつ以外には居ないのだが…

「なんだ？」

「なんだじゃねえよ。しけた面して。金曜日。花の金曜だぜ？ な

あ、放課後、ちよつと寄って帰らないか？」

「何処へ」

「カラオケ」

ゲインツ！

その頭を思いつき叩いてやる。

「いってーな〜！！ あにすんだよ〜！！」

「カラオケだ〜？ いい度胸じゃねえか、受験生。本番まであと二カ月ってこの時期にそーゆーとこで遊んでる余裕が有るってか？」

「うわ〜ん！ 息抜きだよ息抜き！！ 毎日毎日好きでもねー勉強勉強で息つまっちまったんだよ〜」

「ほほう… 息がつまるほど頑張っていると… よーし、その旨、お前んトコのケイコさんにそのまま伝えちまってもいいんだな？」
「げっ！！」

ちなみにケイコさんと言うのはこいつの母親で—— 本来ならおばさんとかって呼ぶ所なんだろうけど『翔ちゃんから、おばさんなんて呼ばれたくない！』とのおたっしで、名前よびさせてもらってる。

「な…な…な… なんで、かーちゃんが出て来るんだ！」

「自治会の役員、申し訳ないが助けてもらう代わりにお前の見張りを頼まれた。すぐ抜け出して遊びに行っちまうって。どうあっても俺と同じ高校に放り込んでくれと手を合わせてお願いされりゃーしよーがねえ。今日から放課後毎日二時間、みっちりやるぞ。逃げるなよ」

「お前、友情を裏切るのか！！」

「この際、目先の友情より、一宿一飯の恩義だ」

「お、お、お、お前、一宿一飯って、いつの時代の人間だ！」

「間違っちゃいないだろうが。ちびの頃から今まで、ケイコさんにや、どれだけ助けてもらったか」

正直、あの頃、ケイコさんを始めご近所さんの温かい差し入れがな

かったら、俺は生きていたのかどうか解らない――恐ろしい事に真面目にだ。

それほどまでに、蓮と今は亡きじい様の家事能力は壊滅的だった…

「――と言う訳で、放課後はおれんちに来るように。なにがなんでも、籐華へたたつ込んでやるから覚悟しろ」

籐華高校は、この辺ではランク上位に当たるところだ。

まあ、俺がここを志望校にしたのは、ひとえに家から一番近い。それだけなんだが。

「なんだよ――そんな無理に決まってるじゃんか――」
「なせばなる」

「俺をお前と一緒にするな――!!」

わーわーと泣きごとを喚き散らすカズを、もうほったらかして予定を算段する。

決してカズは出来ない奴ではないのだ、しないだけで。

勝算は、ある。

俺は、勝てない勝負はしない主義だ。

今日は金曜日だから、蓮は多分遅い筈だし…きつと、飲み会とやらで午前様に決まってる。腹は立つが、まだとめられるほどの立場じゃねえからしかたねえ。

飯は一人分。冷蔵庫に豚肉が有った筈だから、キャベツと炒めて…

いや、いっそ、生姜焼きに…

「――春日井君」

ぶつぶつ考え込んでいた俺は、掛けられた高い声に反応して顔を上げる。

椅子に座っている俺の前にわが校指定のセーラー服。おかっぱより、少し長めの髪が揺れる。同じクラスの高宮だ。

「なんだ？ 今日、委員会でもあったか？」

今学期、同じ風紀委員になった間柄で、それ以来ちよくちよく話すようになった奴だ。

見かけを裏切りさっぱりした奴なので、実は女の中じゃ俺に取っちゃ話しやすい一人でもある。

「さっき、小耳にはさんだんだけど、今日、斉藤君とデートするって？」

「何がデートだ、何が。あのくそ頭に、これから二か月掛けて公式やら単語やらをたたつ込むだけだろうが」

「でも、いーなー。春日井君のお宅でやるんでしょ？ よかったら、あたしも混ぜてくれない？」

「悪いが駄目。俺はカズにかり切りになっちまうし、俺も一応受験生。落ちる訳にはいかねーんでな。暗くなってからお前を家まで送っていく余裕はねえ」

「あら、残念」

せつかく、春日井君の家、見たかったのに…

そう呟きながらもあっさりと引く所がおれをして、話しやすいと言わせる所以だ。

異性から、好意を持たれるってのが実は俺に取ったら結構うっとうしい。

小学の間はまだよかったが、中学に入り、かなりあからさまなアプローチって奴を受けるようになって一時期マジに、いっそ登校拒否ってやるうかと思っただ事が有る。

俺自身はよくわからないが、世間一般に見て、俺の顔つてのはとてもなく整った、俗に言うイケメンと言う奴なんだそうだ。お陰で、靴箱の手紙から始まって、机の中、ロッカー、鞆…どうやって決じ開けるんだか、それ自体で犯罪すれすれだと俺なんかは思うのだが。

いちいち一人一人にお断りって奴をやる余裕なんてこれっぽっちもなかったから（時間も気持ちも何もかもだ！）、恥を忍んで放送委員に掛けあって、『誰ともお付き合いをする気はない』と宣言してもらったのはもう、余りにも情けない語り草ではあるのだが。

どんなに顔がよくったって、たった一人ですら捕まえておけないんだ。

もつともつと…

もつともつと、俺は強くなんなきゃなんない。それも、一日でも早く。

「じゃあさ、皆で受験終わったら、クラスで御苦労さん会でもしない？ 二月の…そーねー、終わりぐらいに」

「やる！やるやるやる！！」

話しかけられた俺より先に、力強く手を挙げたのはカズのやつだ。そーか、そーか、立ち直ったか… —— 放課後が楽しみだ。

「二月って、また随分先の話だな」

「いいじゃん。ごほうびが有った方が皆、やる気が出るんじゃない？」

うんうんうん。

犬の様に首を振るカズ…

なんとなく聞き耳を立てていたらしい周りのやつらからも賛同の声

が上がっている。

「——— ほんときに暇だったらな」

ガタン…と音を立てて椅子から立ち上がりながら俺は高宮にそう告げる。

「あれ、何処行くの？」

「トイレ、付いてくんなよ」

キャー！！ 春日井君がトイレだって！！
だから、いちいち大騒ぎすんじゃねえ。
俺だって、トイレも行けば飯も食う。一人前に欲だって有る。

「あ、春日井君」

「なんだ？」

ドアのところで、もう一度呼び掛けられて振りかえる。

「その時、プレゼント交換とかって考えてるんだけど」

…なんだ？ その段取りの早さは。

「そんで？」

「ちなみに、春日井君って、今、欲しいものある？」

「なんで、俺に聞くんだ？」

「まあ、参考までに」

「…なんで、俺が参考になるんだ？」

「いいからいいから。で、なにか、ある？」

欲しい物。

そう聞かれて、思わずじっと考え込む。

「……フライパン」

「「「は？」」」

おい…　なんで、教室中でハモるんだ？

「今欲しいのって言ったら、フライパンだな。それも高くない千円以下の安い奴。もちろん、テフロン加工は必須だが、それ以外なら安い方が…」

いや、待て。

フライパンはまだ、もう少しもつか…

それより、ザルの網目がやばそうだったか？

この前テレビで見た、絞れるザルってのも興味あるし…

「……なんだ？」

「「「……」」」

「どうした、お前ら固まって」

ふと静かになった教室に違和感を感じて見回すと、なんだかあつけにとられた様な顔をして皆して俺の事を見て居やがった。

なんだ…？

…まあ、いいか。

「高宮、こんなんで、参考になったか？」

「…あ、ありがとう…　お陰で、がんばれそうだわ…」

なんだか、顔が引きつっているのは気のせいか？

おっと、昼休み、時間ももう少しってところか。

やることやって、次に備えとくか…

頭の中、次々段取りを考えてしまうのは、長年身に付いた習性だ。だが、どんだけ段取りを考えても、どんだけ思い通りにしようと思っても、どうしても出来ないものが一つある。

「ほしいもの…」

本当に、俺が欲しいモノ。

手に入れたい。

手に入れる。

何があってもあきらめない。

まだだ。まだまだその時は遠いけれど。

唯一つ、欲しい者は俺が俺の力で手に入れる。

必ず、俺の力で。

「…とりあえず、あと、十センチ伸ばさなきゃな…」

まず身長で追い付いて…

「…帰りに、牛乳買っていくか…」

ついでにフライパンも、やっぱり取り替えよう。

そう決心すると、俺はさっさとトイレに向かった。

— その後の教室 —

「う〜ん… やっぱ、手ごわいわ…」

「アキちゃ〜ん。どうしよう〜」

「…だから、言ったでしょ？ あいつだけは止めとけて。実際何考えてるんだか… このあたしをして、読めないってのが悔しいったらありやしない」

「…だって…春日井君、今月誕生日なんだもの… もうすぐ卒業だし、最後だから、何かプレゼントあげたかったのに〜」

「どうせ、受け取らないでしょ。もう一年の時から宣言してるじゃん」

「でも、あげたいの！ それが、乙女心ってもんなの！」

「……フライパンだって。なんならあげてみたら？ 案外真面目に喜ぶかもよ」

「絶対に、いや〜〜！！」

「…なあ、あれ…」

「ああ… あいつってば、あれ、マジだよな…」

「間違いなく、マジだ。…フライパン、焦がしちゃったのか？」

「いや、たぶん、変え時なだけ」

「カズ、お前、今日翔ん家行ったら、ぜってー新しいフライパンが置いてあつぜ。なんだったら掛けてもいい」

「掛けになんねーよ！そんなもん！」

インプリンティング（前書き）

翔、小六の春。

インプリンティング

インプリンティング—— 刷り込みの事。

鳥のひなが卵からかえる時、真っ先に見たものを親と思う現象。

初めて理科の授業でこの事を知った時、思わず級友たちと鳥のバカさ加減を大笑いをしたものだが…

「起きろ」

「……」

「…起きろ」

「……」

「起きろってんだ！このあほう！何時まで此处に転がってるつもりだ、この酔っぱらい！！」

ゲイン！と音が出るほど頭をひっぱたき、体を揺さぶりまくって初めてそのまぶたがうつすらと開く。

「あれ……？ しょうだ……」

「あれーじゃない！ 今何時だと思ってる！」

「うーん、と……」

「バカ正直に時計を見るんじゃないか？ ……いいか？ 今は夜中の十二時をとくに過ぎた丑三つ時。健康的な皆さんはとつくの昔に眠りの国に入っていらいっしやるお時間だ。なのに、なんで、小学生の俺が、こんな時間にこんなところで、突っ立ってなきやいけないんだ？」

「…えーとね、…おやすみなさい…」

「おやすみなさいじゃねえ！ さあ立て！今立て！お前の寢床はあつちの奥だ！」

「……おく……？ ……う……とおいね………ここでいいや、おやすみ……」

「だから、ここは玄関だ！ こんなところでねるんじゃねえ！」

「……だめ………むり………あるけな……い……」

「こら！ばか！あつ！くつ脱げあほう！寝るな！寝るなって言ってるのに……！」

す——っ……

あんまりにも幸せそうな寢息にもう、ためいきって奴を付くしかない。

いちおう、おれはまだ、バリバリ未成年の小学生で、

いちおうこいつは、二十歳になって、働き出したばかりとはいえ立派な社会人って奴なのに。

「おお、おお。蓮の奴、ま……たこんなところで寝てんのか」

「じいさん………起きてきたんなら、こいつ運んでやってよ」

「無理じゃ、むり。わしゃ……ぎっくりごしで………年寄りに夜更かしは禁物だでの………小用が近くて起きてきただけじゃ。あと頼んだぞ……い」

ほっほっほ………と、どこぞのちりめん問屋のご隠居の様な笑い声を残してさっさと自分の部屋へ入っちまいやがった。

「くそじい！ どーすんだよ、このしまつ！」

無理だ。どうやったって無理だ。

おれ一人で蓮を部屋まで運んで行くな………て………！

「…しょーがねー…」

とりあえず、半分たたきへ落っこちていた蓮の足をよいしょと持ち上げて、体全体をどうにか廊下へ押し上げる。

「…ほんとうに、しょーがねー…」

マジかよ…と思いながら、蓮の部屋から取ってきた毛布をもつすっかり寝こけているその体に掛けてやる。

社会人になって、蓮はこうやって酔っぱらって帰る事があるようになった。

『お酒つて、本当に美味しいのよ〜』

その度にこいつとの年の差を思い知らされてがくぜんとする。

『翔が、大人になったら、一緒に飲もうね〜』

うれしそうにこいつは笑いながら言うけれど。

——— その時が来るまであと八年。

こいつは待っていてくれるんだろうか。

インプリンティング。

あの日、薄暗いアパートの一室で、こいつを見あげた時におれの一生は決まってしまった。

鳥じゃねえ。

一応人間のくせに、親をなくしたばかりの五歳児にそんな理屈なんて通用しなかった。

『一緒に来る？』

そう言つて笑つた蓮の顔だけが、いつまでもいつまでも頭の中から離れなくて。

こんな傍若無人の酒好きの酔っぱらいの、片付けも料理もからつきしなとんでもない女が、おれにとつては、何よりもはなれたくない、はなしたくない相手になつてしまつてゐる。

母親でもない、姉でもない。

おれが、蓮に向けるこの気持ちは何なんだろう…

「早く…」

出来るなら、早くおれを大人にしてやつてくれ。

酔っぱらつた蓮を部屋まで運んでやるぐらい。

そうしたら—— そうしたらきっと、答えが出る。

おれの気持ちに答えが出来る。

インプリンティング。

たとえそれが刷り込みでも。

今のおれにとつて、蓮以上にきれいな女はいないから。

インプリンティング（後書き）

こちらの更新は久しぶりです。

過去話と言いつつ、これまでの状況説明も兼ねているかも…

初めて、じい様も登場。…やっぱりそのうち年表がいるかもしれない
せん。

各務さん家（ち）の事情（前書き）

翔、高校三年の秋。

各務さん家（ち）の事情

土曜日の夕暮れ時。

たつたつたつ……と、何処か律動的な足音が聞こえる。

振りかえると、見慣れたとんでもなくハンサムな顔が目の前にあって、一瞬ほーっと見とれかける。

「こんにちは、マイコさん」

礼儀正しく挨拶されてはつと我に返る。

いかんいかん。齡^{よわい}六十三。旦那も子供も孫までも有る身で他人様の、それも男性に見とれるなんて……

「はい、こんにちは。何時も元気だね、翔ちゃん」

ふつと——そう、にこつでは無く、ふつと笑うなんてのが本当に似合う男がこの世にいるなんて、この子を見るまで思わなかったわよ。

此処は、駅にほど近い、衆人環視の往来で。

ちらちらと、行き交う女たちの視線が突き刺さる。

ふふん。うらやましいか。

たとえ六十になった所で、こつゆう視線を浴びる優越感はこたえられないねえ。普段、機会が無いから、特に嬉しくなつちまうよ。

この、とんでもなく綺麗な男の子——もう、高校三年になつたから、男の子っていうと怒るかもしれないけど——は、お名前を春日井翔君というお知り合い。

実のところ、あたしの家の三軒お隣に住んでいるご近所さんで、お

互いもう十年來のお付き合いというしれものだ。

それこそ小さい時からの顔なじみ。保育園から小学校、中学、高校に入ってから今までも、ずくっと仲良くさせてもらってる間柄。その辺で指くわえてる若い子たちとは、付き合いの年季が違うんだよ、年季が。

「ところで、翔ちゃんや。今日はまた、随分早いお帰りだね」

今はまだ、三時半。

高校生が何時も帰る時間帯から比べたら、いかな事早過ぎる。

「今日は土曜日だよ、マイコさん。学校は休み」

「あらま…」

そうだった。

「でもって、俺は実は修学旅行帰り」

そう言われてみれば、持っているのは何時も、学校へ行く時とは違う大きめのボストンバック。

おやおや、このマイコさんともあろうものが、学校のイベントにチエック入れ忘れるなんて…

何たる失態。もう年かねえ。

「そりゃ、気付かなかった。おつかれさん。何処行っただんだい？」

「九州。あつとそうだ…」

と、翔ちゃんはおもむろにバックを開けて何かを取り出した。

「忘れないうちに、これ、おみやげ」

大したもんじゃないけど。

と取り出されたのは、大きく博多の文字が書かれた四角い菓子箱。

「ああら、こんな事すんじゃないよ。おこずかいだって、そんなにたくさん持ってた訳じゃないんだろ？」

「でも、マイコさんにはいつもお世話になってるし… ほんとに大したもんじゃなくて悪いけど、取っというてよ」

いつも、ありがとう。

なんて、こんな色男に、はにかみながら頭なんて下げられた日にや

「いいんだよぉ もう、ほんとつに、あんたってば律儀なんだから！」

バンバンバン！ もう、本当に、どうしようかと思っちゃって、思わず翔ちゃんの背中を思いっきり叩いちまう。

良い子なんだよね 本当にこの子ってば。
どうしてこんな良い子が出来たんだか。

「ほんと、今更ながらよかったよ、あんたがあの家に来てくれて。
あの頃のあたしたちと来た日にゃあ、毎日毎日どんなにか…」

………シーン………

「…え〜と、マイコさん？」

話しかけてくる翔ちゃんにも、言葉を返せないほど思わず固まっち

まっ たよ。

まさか、まさかとは思っけど。

「翔ちゃんさあ… 今度の旅行の事、言っ てったかい…？」

みんなに。

「ああ、もちろん、当り前だよ。いっつも悪いと思っけど、これば
っかりはどうしようもないからさ」

松さんだろ、山さんと共に、ケイコさんち。

「マイコさんトコ、ちょうど留守だったから。急いでて言えなかつ
たんだ、ごめん」

いや、良いんだよ。それはいいんだけどね。

……まずい… どう考えても、これはまずいよ…

「…あのね、翔ちゃん」

「はい」

「一応、帰る前に心構えとして言っ ておくよ」

「はい？」

「松さんは、火曜日から、ぎっくり腰で入院中。山さんとの奥さ
んは、旦那さんトコのご実家からの呼び出しで、同じく火曜の夜か
ら出かけてる」

「……」

いや、言葉失くしちまうのも無理ないけどさ。

「……確か、カズのとこのケイコさんは…」

「単身赴任の旦那がぶっ倒れたからって一昨日の朝から出て行ってる…」

「……」
「……」

「え」と　大丈夫かい、翔ちゃん…」
「つまり…三日間…蓮は野放しだったってことですか…？」

野放しって…　…犬じゃないんだけどね、蓮ちゃんは…
コックリ。

頷くしかなかったあたしを見届けてお辞儀一閃、翔ちゃんは猛ダッシュで駆けだした。
行く先はわかってる。あの子の家、各務さん家^ちだってね。

よつこらしよ。

もう、見届けるしかないねえ、これは。

老体に鞭打って（？）よつこらしよと翔ちゃんの後を追いかける。
平屋のその屋根が見えた途端、となり声が辺り一面に木霊した。

「だ～～～～っ！！　なんなんだ！この惨状！　起きろ！起きろってば！蓮！」

「あれ～～～？　翔…もう朝～？」

「朝、どころか、もう夕方だ！　　いったい何処に転がってやがるこの酔っぱらい！」

「いやゝん。寝たの四時なんだもん…　もつと寝るゝゝ」

「寝るじゃねえ！　この本、この服、この新聞！　おまけになんだこの段ボール！　足の踏み場は、いたいどーした！？」

「あ、それゝゝ？　翔が留守の間に、少し部屋、かたそうかなゝとおもったの。でもねゝでもねゝなんでかなゝ　……訳わかんなくなっちゃったんだよねゝゝ」

あはは…

「あはは、じゃねえ！！！」

——　　はは…　　やっぱりだねえ…

玄関先の引き戸を開け放ったまま、持っていたバックを放り出して、勢い片付けに入っている翔ちゃんの姿が見える。

その周りに、なんで？と思える程散乱した、モノの山。

相変わらず、片付けつてもんが出来ない子だねえ、蓮ちゃんは——

——　　まあ、その他の家事だって決して褒められるようなもんじゃないんだが。

翔ちゃんが、この家に引き取られてきたのが五歳の頃。

その事を、五年前ぱっくり逝っちゃった、各務のじいさんから聞いた時にやあ、近所のものはみんな顔をそろえて真っ青になったもんだった。

なにしろ、各務のじいさんときたら、生活能力のその皆無さで近所ではあまりにも有名だったから。

たった一人の身内で同居していた蓮ちゃんは女ながら決して器用な

方では無かつたし、そこへ年端もいかない五歳児が仲間入りすること、皆、戦々恐々としたものだ。

夜泣き？ 家出？ 果ては餓死？—— まあ、それは大げさだけれど。

ところがどっこい。

この五歳児がひろいものだった。

頭が良くて顔が良く、おまけに器用で、働き者。

小学校の低学年の頃には、もういっぱしの主婦になるほどで。

それが、この翔ちゃんさね。

今でも、ここいらへんの女どもが、そろってころつとイカれるぐらい良い男ではあるけどね。

あ、勘違いをおしでないよ。

あたしら、本当にあの子の身近に居るもんにとつたら、あの子はアイドルみたいなもんだから。

ただたどしく包丁の使い方をあたしたちに聞いてきたあの子に、手とり足とり、料理のイロハを教える様になったのは結構な昔。

なおかつ、その余りの出来の良さに、家事の全てをそれこそ一からおもしろがって教え込んだのは周りに居る、あたしも含めたおせつかい焼きのおばさん連中だったけど。

—— 本当にあの子で良かったよ。

死んだ各務のじいさんの、先見の明にはあきれるね。

家事万能だったゆりちゃん（あ、これは各務のじいさんの連れ合いの名前だがね）に甘えて、家事は一切出来ない様なボンクラだったが、あのじいさんは、その分世の中つてもんをよく見ていて知っ

ていて。それこそ、自分に何かあった時の事まで、あらかじめちゃんと算段しておくぐらい用意周到な人間だった。

かわいい孫の蓮ちゃんが困らない様に、引き取った翔ちゃんが、望むだけの教育を受けられる様に。

急の発作で自分がコロツと逝^{つて}ちまった後でも、何が有っても生活に困らないだけのモノと伝^{つて}手を　しっかり二人に残しておいてくれた。

そのじいさんが見つけた、一番すごい掘り出し物。

当の本人はそんなつもりで引き取ったんじゃないだろうけど。

もう、今更この家は、翔ちゃん無しには回らない。

この辺のモンはそんな事、み^{んな}んな先刻ご承知さ。

変に勘ぐって噂流す奴は、それ相応の覚悟つてもんをしてもらわないとね。

今更、血がつながって無いとか、本当の兄弟じゃないだとか…　そ

んな事はもう、どうだっていいんだよ、あの二人にとってはね。

蓮ちゃんには翔ちゃんが。

そして翔ちゃんにも、確かに蓮ちゃんが必要なんだから。

…この先、いつたいどうなるかね…

この先。

翔ちゃんはまだ十七で、蓮ちゃんはもう二十五。

何かあってもおかしくないが、なんにもないからじれったい。

「蓮！　こら、見てる暇あったら手伝え！」

にこにこと…　ぼーっと翔ちゃんを見ている蓮ちゃんの姿が見えて、あたしは声を掛けるのを止めた。

あの子たちにはあの子たちの大事な大事な時間がある。
それを邪魔するなんて野暮^{やば}は、おばさんにや出来ないね。

九月のまだまだ明るいつ暮れ時に、翔ちゃんにもらったお土産をし
っかり抱えて、あたしは何故か明るい気持ちでよつこらしよつと家
路に着いた。

各務さん家（ち）の事情（後書き）

これにて、一応このシリーズは完結。

本篇の隙間の補完するために書き始めたような感じでしたので、本篇の目途がついた時点で、納得してしまいました。

短いシリーズでしたが、楽しんで書けました。

これからは、本篇に全力投球！

そちらで、どうかよろしくお付き合いください。

少し、訂正を入れております。

ご指摘ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4570o/>

彼女までの背の高さ

2010年11月14日08時52分発行